京まち工房

（財）京都市景観・まちづくりセンター　ニュースレター

まちセン10周年

SPRING 情報交流誌 no.42

パートナーシップで進めるまちづくり

人と人のつながりの再生

景観・まちづくりシンポジウム「個から始まるまち育て～まちの縁側で卵がかえる～」を開催しました

今日、地域での人と人とのつながりが薄れ、本来地域社会で行われていた子どもたちへの社会教育の機能が低下し、世代や立場を越えた人と交流の機会が少なくなってきていると言われるようになりました。しかし、まちなかでは、いろいろな人たちが自由に出入りでき、話をしたり何か活動できる「まちの縁側」と呼ばれる場や、地域に根ざして仕事をしている企業が、将来のまちを担っていく子どもたちへ地域への思いを伝えていこうという動きも見られます。このような活動が、人と人のつながりを再生し、地域本来の力を呼び戻すことにつながっていくと思います。

今回の景観まちづくりシンポジウムでは、まず「まちの縁側」という活動について広く市民の方に知っていただくことを目的として開催しました。センターでは、今後とも人々の交流の輪が広がるような活動を応援していきます。

景観・まちづくりシンポジウム

個から始まるまち育て

～まちの縁側で卵がかえる～

最近、まちなかでいろいろな人たちが自由に出入りでき、語らいや一緒に活動することに利用できる場所が見受けられます。それを「まちの縁側」と定義づけ、「まちの縁側」あるいは「まちの縁側」的な場づくりを推進し、その運営に携わる人たちが継続的に交流してお互いの悩みや課題を共有しながら、それぞれの活動を一層発展させるよう、相互の緩やかなネットワークづくりが図られるよう手助けするとともに、その活動を広く市民の方々にも知っていただくため、このシンポジウムを企画しました。

第一部では、名古屋の「まちの縁側MOMO」を本拠地として、まちの縁側づくりを支援されている、まちの縁側育くみ隊代表理事の延藤安弘さんをお招きして、日本やイタリアの縁側の事例紹介をしていただきました。スライド上映にはケメコの歌の作曲者で知られる澤田好宏さんが、ギター伴奏で飛び入りし、軽妙な延藤さんの語り口と合わせて楽しい一時となりました。

延藤さんは、暮らしの景観・まちづくりという切り口から、「高齢者は高齢者、こどもはこどもと縦割りにせず、生きとし生けるもの皆がつながり合って生きる。まちの縁側とは人の生きる力が内側から育まれていく、新しい小さな公共空間ではないか」とおっしゃいました。

続いて第二部として、クニハウス・ハルハウスを主催する丹羽國子さんから、現場からの報告がなされました。クニハウスの活動を紹介する中京テレビのビデオの上映の後、丹羽さんは、「あなたは、生まれた直後から、生涯をたった一人で生きることができますか」と会場の参加者に語りかけられました。高齢者の認知症防止や子どものひきこもり等の事例をあげて、「ほっとする居場所は、心を開く場所として役立つ」と、世代を超えて人が集う縁側の役割について説明されました。

第三部は縁側談議と称して、京都のまちの縁側の仕掛け人たちがそれぞれの活動を紹介し、議論を深めました。立命館大学教授の乾亨さんが亭主となり、4人の客人をお招きしました。

とねりこの家代表の水無瀬文子さんは、育児不安を抱える母親の例をあげ、「行く場所、相談できる場所があれば、皆が安心して暮らせると思う」と、まちの縁側の大切さを強調されました。

喫茶スペースかたりば朋の横山映子さんは、「一人で食事をしている地域のお年寄りに、低価格の食事や、交流の場を提供している。男性にももっと利用してほしい」と、活動を報告されました。

町家を改修し、アリサハウスミュージアムとして一般に公開している振本ありささんは、「文化や暮らし方を人生の先輩から教えてもらって、「ほんまもん」をつないでいきたい」と語られました。

絹川雅則さんは、縁側を利用した経験から、「その居心地の良さにコロッといかれた」と語り、サポーターとして、空いている会社の寮を活用した新たな縁側を作る場所の提供について考えを示されました。

乾さんは、縁側の活動報告を聞いて、「それぞれテーマは違っても、何とかしなければ、こういう場所があればというシンプルな思いからスタートしている。そして、それを人の力が支えているという点で共通している」と指摘されました。

最後に延藤さんからまとめとして、京都のまちの縁側が今後広がっていくための4つのキーワードが提起されました。

1つ目は、まちの縁側には色々なやり方があること。

2つ目は、のんびり、ゆっくりとネットワーク＝人の輪を創りながらほっとする居場所づくり。

3つ目に、「こんな居場所があったらいいなあ」と言うシンプルな発想から始めよう。

4つ目として、サポートの多様さを引き出す運営の創意工夫が行われること。

人のためにやる事が楽しくてしょうがない、その数珠つながりを作り出す、景観・まちづくりとしての「まちの縁側」を、京都に、全国各地にもっともっと広げていこうと提唱されました。

さらにシンポジウムの終了後、遠く敦賀から「まちの縁側」を始めたいと話を聞きに来られた方や、東京の世田谷から来られた方など、多くの方とまちの縁側の主催者が1時間半にわたって交流がされました。

なお、このシンポジウムは、京都三条ラジオカフェ（FM79.7）が収録し、3月の毎週金曜日午後8時から放送されました。

SYMPOSIUM

SUMMIT ROJI

全国路地サミット2007に参加

10月27日から28日にかけて、全国路地サミットが静岡県新居（あらい）町で開催されました。

新居町は小路（しょうな）と呼ばれる路地がたくさんあることで有名なまち。まさに路地サミットにぴったりの開催地でした。新居町の駅に降り立ってびっくりしたのは、半天を着た人の群れ。旅館の客引きだと思って無視しようと思ったら、「路地サミットに来られた方ですか？」と聞かれました。

えっ、スタッフの人？そうです、まちの人が約40人、ボランティアとしてこのイベントを応援してくれているという、まさに、まちをあげての大事業。

小路には、人がすれ違うと一杯なくらいの狭い道が多く、それらは、江戸時代に計画的に作られたものです。江戸時代、宝永の大地震でまちが全滅した後、ここに現在の町割りが作られました。山麓に寺や神社を配し、水路を定め、たった3ヶ月で、20軒の旅籠と7つのお寺が移築されました。その時に造られたまち、そこに小路があります。道にはすべて掘割が付いていて、そこで洗い物ができ、井戸もその横に造られました。現在、掘割は暗渠になっているかグレーチングが載っているため、昔よりは道幅が広くなっています。

雨の中、小路を中心としたまち歩きの後、町民センターで路地サミットが開催されました。

まず、東京大学大学院教授の西村幸夫さん（全国路地のまち連絡協議会顧問）が、基調講演「路地の風情をまもり・活かすことの意義」を話されました。西村さんは、「かつて路地はマイナスのイメージしかなく、まちにとって負の財産のように言われてきた。しかし時代は変った。路地には人間の生活の匂いがする。コミュニティが活きている。この財産をどのようにまもり・活かすことができるかが今問われている。耐震や防災が問題となる。しかし、「路地からのまちづくり」を編集したとき、防災の専門家である室崎先生と中林先生に原稿を依頼したら、お二人とも路地を肯定的に評価しておられてほっとした。室崎先生が「防災」ではなく「路地を活かした減災」という言葉を使われたのはとても印象深かった」と講演されました。

続いて第一セッション「全国路地のまちづくり　活動報告」が行われ、昨年度の開催地長野県諏訪市、青森八戸横町地区、東京神楽坂地区、大分別府地区、長野市善光寺参道地区・松代地区、神戸市長田区駒ヶ林地区から、それぞれの地区でのまちづくりの現状が報告されました。京都からは、関西木造住文化研究会（KARTHカース）の代表田村さんから、「地域固有の木造伝統文化を活かした地震・火災に強い住まいづくり」と題した報告がされ、これまでの活動の結果、ようやく木の外壁や格子、木製の軒裏が法制度上認められるようになった経緯が話されました。また、長野県諏訪市からは「辻と小径のまちづくり事業」として、協定事業や計画事業として建物改修や看板設置、親水スペース、ポケットパークなどに対して市が補助金を出す制度について説明がされました。また、神戸の松原さんからは、神戸市の「近隣住環境計画制度」によって、建築基準法のただし書などの緩和を利用して地域の計画をつくり、計画に基づいて許可を得て法規制をクリアーする方法が説明されました。例えば、道路幅員を狭くする、用途地域で禁止しているものを建築する、接道していない敷地に建築する、市条例の内容を緩和する、などがこの制度を利用することで可能になるという、びっくりする内容でした。

報告をされるKARTHの代表田村さん

休憩を挟んで第二セッションでは、全国路地のまち連絡協議会の大和田清隆さん（前浜松まちづくりセンター長）のコーディネートによるシンポジウムが開催され、新居町からは小松楼の保存活用に向けた活動やマップの作成と活用の取組を、東京都墨田区向島地区からは、向島学会を結成し「路地園芸・粋な路地のしつらえによる環境共生型まちづくり調査」を実施したことなどが報告されました。また、東京都台東区谷中からは、20年前に地域の有志が「谷中に学んだことを谷中に返そう」と谷中学校を創設し、その活動の中からまちづくり活動を支援するＮＰＯが2つも生み出されたことが報告されました。

質問や提言をされる明倫学区の河野泰さん

１時から５時半までという、みっちり４時間半のサミットの後、６時からは地元の魚がふんだんに用意された交流会が実施され、昔からの知り合いとの再会や、新しい出会いが生まれました。

京町家の保全・再生の事例

～西ノ京の町家通り～

西ノ京の住宅地に昭和の始めに建てられた賑やかな９軒の連棟町家が建ち並ぶ通りがあります。その町家には、元々住み続けている住人に加え、建築やウェブのデザイナー達、お菓子教室や語学教室を営むフランス帰りの食ジャーナリスト、学生の集う家として楽しむ大学の教授など、様々な住人がいます。このように賑やかな町家になったのは約７年前の出会いがきっかけでした。

大家さんである清水さんが東京から戻り、家業に従事された当時、９軒のうちの１軒が空家となりました。その空家は昭和時代に大きく改造されていたため、元の姿への修復を検討することになりました。清水さん自身、家に手をかけることが好きだったこともあり、試しに仲間と天井のベニヤをめくってみたところ、元々の素材が出てきたそうです。幸い良い材料を使用しているしっかりとした建物だったこともあり、修復を開始。大工さんや左官屋さんに工事を依頼しつつ、プロに依頼すると大きなコストがかかる細かな部分の修復と各部の磨きなどは仲間と共に自主改修をされ、元の姿に戻されました。その仲間の息子さんであり大学で建築の勉強をされていた、現在この町家でデザイン事務所を営んでいるアーキテクトタイタン（以下タイタン）の河原さんや共同主宰の中川さんが改修のお手伝いをしたそうです。タイタンの皆さんは、この現場の前に北区にある町家の修復経験もあったことで頼もしい助っ人となりました。そうして改修を終えた家には芸術大学で教鞭をとっている真板教授が住まれることになりました。

１軒目は「亀笑亭」と名付けられました

そうこうしていると、更に隣の１軒が空家になり、次の修復プロジェクトが始まりました。ここはタイタンの事務所となりました。お二人は大学院生の時に起業をされ、ここに来る前はビルの一室で仕事をされていました。しかし、町家に深く関わるうちに町家で仕事をしたいという気持ちになり、移転することを決めたそうです。このことにより、２軒の修復された町家が並び、まちなみとして注目されるようになりました。

２軒目は２階作業場として使用されています

そして３軒目には町家に魅せられた食ジャーナリストの多田さんが住まれ、最近修復された４軒目は写真スタジオとしてタイタンさんが使用されています。この新たな住人さん達は人との交流が大好きなようです。真板教授は頻繁に学生を呼び、宴を開いているそうで、ご近所の方々も訪れるそうです。タイタンさんも来客が多く、今は新しい写真スタジオを近所の方にどうやってお披露目会をするか思案中だそうです。多田さんも「教室」での人との交流はもちろんのこと、時々パーティーを開くこともあるそうです。このように近所の方もまきこんでおつきあいをされていることが、この町家だけでなく町内の賑わいにつながっています。

３軒目のお菓子教室などを開催している町家です

こうして町家が修復されたことにより、まちにゴミがあまり捨てられなくなったり、近所の方が誇りに思うようになったりと、ちょっとした「良いこと」があふれるようになってきているそうです。清水さんは、「お金をかけるところにはきちんとかけて、家に正当な評価を与えたい。修復には確かにお金がかかる。しかし、やみくもに多額の費用をかけるのではなく、限られた予算で最大の効果を得るためにはどうするかを考えることが大切」とおっしゃいます。このような経営者としての強い思いはまちなみの保全となり、そして、何よりも魅力ある人が集まるという出来事につながっているのではないかと思います。

第2回全国町家再生交流会

平成19年12月1日、2日の2日間、上七軒歌舞練場（上京区）において、「第2回全国町家再生交流会」が、京町家の保全・再生に取り組む市民活動団体「京町家ネット」の主催により開催されました。

第1日目は、講演と全国各地の取組の紹介の後、その日の締めくくりとして立命館大学教授リム・ボンさんの進行のもと、NPO法人京町家再生研究会理事長大谷孝彦さん、京都府立大学准教授宗田好史さんも加え、パネルディスカッションが実施されました。

第2日目は、午前中に改修町家・工事現場見学会（協力：京町家作事組）及び「第1回花街文化シンポジウム」（主催：花街文化研究会）が開催され、午後からは5つの分科会に別れて京町家の各論について積極的な議論が交わされました。交流会の最後には、アピール文が読み上げられ、地域の特徴ある暮らしと文化が凝縮した市民共有の歴史的資産として町家の保全・再生、利活用に取り組むことや、この交流会の継続的な活動と全国の仲間に働きかけて町家再生ネットワークの輪を一層拡げていくという決意のもと、次回の開催地も金沢に決まり、溢れんばかりの拍手のもと交流会が幕を下ろしました。

■第１日目概要

●講　演

「京都の歴史的景観の変遷」：矢野桂司氏（立命館大学教授）

文化的研究と電子的研究の融合を通じて京都の様々なものがデジタルコンテンツとして有用となること、バーチャル京都の目的は平安から平成までの4次元空間を京都の景観に構築することにあることなどを強調されました。

「京町家再生の動き」：宗田好史氏（京都府立大学准教授）

1980年代に急速に高まった京町家喪失への危機感を背景に、京町家への支援として、①修景助成、②税制上の優遇処置、③売買・賃貸の斡旋の重要性を訴えられました。また、新景観政策に賛成の市民の声に応えるためにも、未来の京都に京町家を活かしていくことが大切であると述べられました。

●パネルディスカッション「各地の取組紹介」

「新潟まち遺産の会」：澤村明氏（新潟まち遺産の会監事）

最近の取組として、文化庁の支援を受け新潟県で有数の豪農二宮家をバックに実演された「堀川久子舞踏二宮家の季節米倉が鳴る」の模様が紹介されました。

「今井まちなみ再生ネットワーク」：米村博昭氏（NPO法人今井まちなみ再生ネットワーク副理事長）

活動の最大の課題は老朽化した町家の活用であると述べ、空家バンクの創設だけでなくサブリース事業も手がけるなど、「まちづくり」から「まちづかい」への挑戦が報告されました。

「ネットワーク竹原」：佐渡泰氏（NPO法人ネットワーク竹原理事長）

空家所有者の意識調査から清掃・修復ボランティア、転貸まで様々な取組の展開を紹介。入居前に短期の貸出期間を設け、入居者がなじめるかどうか検証できるようにするなど、地域コミュニティへの配慮の重要性も述べられました。

講評：リム・ボン氏（立命館大学教授）

町家は負の遺産だと言われていたバブル期から約10年後、その価値が見直され始め、そして、今まさに歴史的転換期に当たると言え、今後は「社会資本の形成と町家の再生」がテーマであると提起されました。また、これからの新たな展開を前に原点に戻るべく「なぜ町家再生に取り組むのか？」といった問いを投げかけられ、「成熟型市民社会の形成のため」、「京町家を通じての自己実現」、「人との関わりが面白い」などそれぞれの立場から町家の再生に取り組む熱い思いが語られました。

■第２日目分科会概要

●第１分科会「法・制度と京町家」

町家の保存運動は建築基準法ぎりぎりの範囲で進められているのが現状で、改修が進まない伝統的建物が出てきていると語られました。また、地方ごとに異なる問題に対処できる法律にすることが重要という意見が出されました。

●第２分科会「町家の住まい手と担い手をとりまく環境づくり」

「町家」＝「住まい」として考えることを基盤に、地域に根ざした活動として、文化・形だけでなく人が育っていく町家をどのように残していくのかが大きな課題として挙げられました。

●第３分科会「技術と町家」

技の再生・継承とそれをふるう場の重要性、伝統構法が否定される時期が続くなど法律上の矛盾、リユースの情報交換として地域連携の必要性などが議論され、最後には全国作事組連絡協議会の発足が決定されました。

●第４分科会「町家の利活用と流通」

金沢、竹原、八女における京町家の利活用について改めて報告がされました。新たな視点として、町家の文化的価値が上昇すると不動産価値も上昇し、伸び盛りの若手が借りられないというジレンマも浮かび上がりました。

●第５分科会

平野郷、谷中、龍野、京都での取組の紹介が行われました。どの地域においてもイベントに際して建物内を見せることに戸惑いを持っていることが分かり、参加する側のまち歩き作法の必要性が認識されました。

改修町家・小路現場見学会

住民による住民のための公園運営 有馬富士公園 パークマネージメントの現場から

～住民による住民のための公園運営～

有馬富士公園は、2001年に開園した兵庫県三田市に位置する県立都市公園です。

有馬富士公園の面白さは、住民がゲスト（来園者）として

有馬富士と福島大池

公園を利用するだけでなく、ホスト（主催者）として公園の運営を担っていることです。開園する前から、有馬富士公園の関係者によって、公園運営にどのように住民を参画させていくのかということが議論されました。様々な議論の結果、一定の条件を満たした住民グループが公園で自分達の活動を企画・準備・運営する「夢プログラム」というしくみが編み出されました。現在、夢プログラムには、来園者が参加し、楽しむ自然観察会などの「イベント系プログラム」や住民グループが自然の調査研究を行う「調査・研究系プログラム」、景観や動植物保全のために園内の棚田・里山の維持管理作業を行う「維持管理系プログラム」などがあります。住民グループの方々は、「有馬富士公園で活動したい、自分達のグループの思いを来園者に伝え広めていきたい」という思いで活動しています。2007年度には約30以上の住民グループが100件を超えるプログラムを実施するまでになりました。

開園当初、公園で何かしたい人を公園の運営に呼び込み、また、公園でプログラムを実施するために必要な知識や技術を習得できる講座として「ありまふじクルー養成講座」が開催されました。有馬富士公園では、公園の管理者と一緒に協働して活動する人を「ボランティア」ではなく、「クルー」と呼んでいます。その初代受講生の中で、公園運営に積極的に関わっていらっしゃる三田市在住の吉田滋弘さんに、ご自身の夢プログラムの活動内容や公園に対する思いをお伺いしました。

吉田さんは、もともと三田の自然に関心があり、有馬富士の自然を外に向かって誇れるようにしたいとの思いから講座を受講されたとのこと。「公園内の棚田では、他のグループや来園者と年間を通じて田んぼづくりを行い、田んぼにすむ昆虫や植物の観察会も行っています。田んぼは、田んぼ作業を通じて自然と共生し、命の大切

初代クルー卒業生の吉田さん

さを伝える場所になっています」、「公園の運営で大切なことは、3つのS［Sustainability（継続性）、Symbiosis（共生）、Satisfactions（満足）］です」、「継続してやっていくためには、意見の異なる人とも協働し、公園に関わるホストとゲスト双方の満足度を高めることが必要です」と、熱く語っていただきました。現在、吉田さんは、自然観察ハイキングや古代米づくりなどの夢プログラムグループ「自然の学校」の代表として活躍中です。

棚田での田んぼづくり

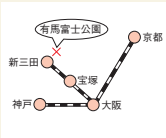
～すべては人づくり～

住民グループは、プログラムの実施回数を重ねることで公園に関する知識を豊かにし、技術やサービスを向上させ、プログラムの内容を充実させていきます。参加者からの喜びの声は主催者の充実感につながり、公園がより身近な存在に変わります。ここに、住民を主体にした公園運営の意義があります。プログラム実施のプロを養成することよりも、公共空間に主体的に関われる市民感覚を醸成することが有馬富士公園の大きなねらいです。

今後は、公園の来園者数を増やすとともに、公園で何かしたい人に有馬富士公園を知ってもらう機会をさらに広げることが大きな課題です。そのための情報発信の方法を模索しています。

「活動に終わりはありません。一旦転んでも、また誰かが起き上がって活動を続けているのがこの公園のいいところ」と吉田さん。有馬富士の魅力を発信しつづける様々な住民が迎えてくれるこの公園に皆さんも足を運んでみてはいかがでしょうか。

有馬富士公園　所在地
〒669-1313　兵庫県三田市福島1091-2
有馬富士公園パークセンター（公園管理事務所）
TEL.079-562-3040



京都まちづくり学生コンペ2007
公開プレゼンテーションが開催されました

～最優秀賞のほか、「世界歴史都市会議」での発表グループも決定！～

今年度、センターでは財団設立10周年事業として、全国の大学生等を対象に、京都都心部に対するまちづくりのアイデアを募集する「京都まちづくり学生コンペ2007」を開催しました。

昨年9月から応募を受け付け、前号でご紹介したワークショップを踏まえ、地域の現状を学んだ参加学生は、より地域の実態に即したアイデアをしぼり、46組が提案を行いました。その後、地域のまちづくり委員会の代表、不動産事業者、学識者で構成する審査員会により、2部門（地域まちづくり部門、都市デザイン計画部門）で書類審査を行い、計10作品が通過しました。アイデアの中には、ご近所づきあいや駐輪問題、路地の活用等、学生がまちの課題であると感じた様々な切り口からの提案があり、実際に地域まちづくりや土地利用に活かすことができるかという視点で評価されました。

1月27日には10作品の公開プレゼンテーションが開催され、学生の皆さんが力強い発表で会場を盛り上げました。コインパーキングの一角に町家風の駐輪施設を設けることで、景観への配慮と放置自転車対策を両立する案や、従来の回覧版にコメントを書き込める機能や、家庭ごとの鍵付きメールボックス機能を持たせることで、地域内の交流を充実させる案などが説明されました。審査の結果、地域まちづくり部門の最優秀賞には、立命館大学乾ゼミの「本能発 高倉行 ～新しいコミュニティ形成を願って～」が選ばれました。実際に本能学区でまちづくりに関わる中で、元学区のコミュニティの現状を学習し、新旧住民の交流を可能とするような現実的な提案であったことが評価されました。都市デザイン計画部門の最優秀賞には、京都大学大学院 高田・神吉研究室Bの「まちはいきている ～京都毛細血管血流促進細胞活性化計画～」が選ばれました。細街路という京都都心部の特色的な空間を題材にし、路地をつなげていくと同時に人々の生活シーンや生活支援などを路地に取り込むことで、地域が持つエネルギーを循環させながらうまく活用しようとしている点が評価されました。なお，京都大学大学院高田・神吉研究室Bは，平成20年6月にトルコ共和国コンヤ市で開催される「世界歴史都市会議」で京都代表として発表する予定です。路地の潜在的な力を活用する提案は外国でも印象に残るとの評価で、京都のオリジナリティが若い世代によって世界に発信されることをセンターも期待しています。

表彰式後に開かれたワークショップでは、審査時の質疑では確認できなかった提案のセールスポイントやその問題点について、学生、審査員、会場参加者で意見交換が行われました。ワークショップでは学生同士が品評しあう場面があり、大いに刺激を受けあった中、学生からは、「もらった意見を研究に活かしたい」、「今回を機に地域の会合に参加して提案の具体性を高めたい」との抱負が述べられ、地域や事業者の方にプレゼンし、意見をもらう機会を得たことに感謝の声もありました。

今後センターは、参加学生に提案の対象地域で発表してもらい、地域の方々と実現化について考える場を設定するとともに、提案内容によっては、行政や職能団体等と実現化を考える場を設定できないか検討しています。また、コンペを単発のイベントで終わらせないように、今回の意義を関係者で共有し、その継続に努め、学生のまちづくりへの参加機運を盛り上げる取り組みを検討していく予定です。

平成19年度「景観・まちづくり大学」を開催しました！

京都のまちづくりに関心のある方が集い、学び、交流する場として、「景観・まちづくり大学」は、多くの市民の方々にご活用いただいています。今年度は、昨年9月に施行された新景観政策に伴い京都の景観に関する講座や、見学会など体験しながら学ぶ講座、対談形式の講座など、様々な講座を開催しました。平成20年度も、より多くの方の受講していただけるセミナーを企画していきますので、ぜひご参加ください。

■京のまちづくり史セミナー

＜第１期（第１回～第３回）「京のまちづくり史とは」＞

京都のまちづくり史を、時代ごとに「自治」に焦点を当て、柔軟にまちづくりを変容させてきた町衆の行動と知恵に関するエピソードを交えたお話をいただきました。

7／28　第1回「動乱の世紀と町衆自治の胎動」　髙橋康夫氏（京都大学大学院教授）

8／25　第2回「近世のまちの成熟と町衆の活躍」　日向進氏（京都工芸繊維大学教授）

9／22　第3回「近代の町衆が取り組んだ自治と都市づくり」　中川理氏（京都工芸繊維大学教授）

＜第２期（第４回～第６回）「建築物からまちづくりの背景を読む」～現地見学会～＞

見学を通して、建築物の解説とそれが建築された背景についてお話をいただきました。参加者の方からは、実物を見ながら解説を聞くことにより理解が深まったとの声が聞かれました。

10／27　第4回「近代建築から見る近代の建築活動とまちづくり」　石田潤一郎氏（京都工芸繊維大学教授）

11／17　第5回「公家屋敷の建築様式と京都のまちについて」　中村利則氏（京都造形芸術大学教授）

12／8　第6回「近代期の洋風町家にみる町衆の進取の精神」　大場修氏（京都府立大学教授）

＜第３期（第７回～第９回）「今後の京まちづくり史をデザインする」＞

京都の風致や歴史的建造物を取り巻く保全と創造の歴史や、京町家の保全と継承のあり方、歴史や変遷を踏まえた今後の京都の都市デザインのあり方についてお話いただきました。

1／26　第7回「風致の保全と創造を考える」　中嶋節子氏（京都大学大学院准教授）

2／23　第8回「歴史的建造物の保全と継承を考える」　岸泰子氏（京都大学大学院助教）

3／22　第9回「京まちづくり史からまちのデザインへ」　山崎正史氏（立命館大学教授）

■まちづくり情報発信セミナー

＜第１期（第１回～第３回）「京都の「景観」を多角的に考える」＞

景観とまちづくりとの関わりや歴史都市における景観形成のあり方など、事例を紹介していただきながら、京都の景観づくりがどのように進んでいくのかについてお話いただきました。

7／22　第1回「「都市景観とは何か」－京都の景観づくりを探る」　大西國太郎氏（京都造形芸術大学客員教授）

8／19　第2回「京都の地域性と景観形成」　門内輝行氏（京都大学大学院教授）

9／9　第3回「まちなみ景観と地域アイデンティティ」　苅谷勇雅氏（文化庁文化財部参事官）

＜第２期（第４回～第５回）「まちづくりと「自治」を考える」＞

地域のまちづくりリーダーと学識経験者が対談形式で、30年以上にもわたる地域のネットワークづくりの実績や、担い手やまちの育て方についてお話いただきました。

10／13　第4回「地域のものは地域で守る」　高瀬博章氏（春日住民福祉協議会会長）乾亨氏（立命館大学教授）

10／21　第5回「「学び」「育み」からまちづくりを考える」　梶田真章氏（法然院貫主）山口洋典氏（應典院主幹）

＜第３期（第６回～第８回）「京都ブランドとまちづくり」＞

企業や商店街が取り組む活動を通じて、地域の活性化や魅力向上に与えた影響や、地域に対する思いなど、事業者と地域の関わり方について事例を交えてお話いただきました。

1／19　第6回「地域事業者の活動から見る京都のまちづくり・人づくり・地域づくり」　井上誠二氏（建都住宅販売株式会社代表取締役）

3／8　第7回「商業の視点から、まちづくりを考える～つなぐ・発信する・継続する～」　髙橋亮太郎氏（KICS代表社員　四条繁栄会商店街振興組合職務執行者）宇津克美氏（京都錦市場商店街振興組合理事長）福井雅之氏（京都商店連盟）

3／20　第8回「京都から「三方良し」のまちづくりを発信」　塚本喜左衛門氏（塚喜商事株式会社代表取締役社長）

■京町家再生セミナー

今年度のセミナーは「京町家を上手に楽しく住みこなそう」をテーマに、京町家の保存・再生に取り組んでおられる7団体の企画・運営のもと、各団体の活動の特徴を活かした情報提供などを行い、京町家の保全・再生に向けた皆さんの一歩をサポートするセミナーを開催しました。また、セミナー参加者の集いは「私と町家との付き合い方」をテーマに、参加者の自由に意見交換、情報交換できる場を開催しました。

《セミナー》

＜第１、２期（第１回～第４回）＞

7／29　第1回「ひと・まち・こころをつなぐ－京町家の改修事例をとおして－」　野村正樹氏（ローバー都市建築事務所）

8／26　第2回「庭の楽しみ－歴史・意匠・手入れ－」　仲隆裕氏（京都造形芸術大学環境デザイン学科教授・日本庭園研究センター主任研究員）、山田拓広氏（文化財庭園保存技術者協議会）、吉田幸治氏（文化財庭園保存技術者協議会）

9／30　第3回「京町家の活かし方－京町家の貸し方借り方教えます－」　吉田光一（社団法人京都府宅地建物取引業協会　京町家専門小委員会委員）、西村孝平（社団法人京都府宅地建物取引業協会　京町家専門小委員会委員）

10／21　第4回「町家の魅力を活かして暮らしやすさと耐震・防火性を高める」　鈴木　有氏（木の住まい考房主宰、金沢工業大学名誉教授）、田村佳英氏（悠計画研究所代表）

＜第３期（第１回～第４回）＞

2／9　第1回「京町家の可能性―楽町楽家をとおして－」　松井薫氏（京町家情報センター）、山田公子氏（京町家友の会）

2／17　第2回「地域の工務店から学ぶ改修のポイント」　米田政司氏（米田工務店六代目棟梁）米田安志氏（米田工務店七代目棟梁）力石教夫氏（力石一級建築士事務所）

3／9　第3回「建築言葉のいろはと日常手入れのポイント」　木村忠紀氏（木村工務店）、堀榮二氏（堀工務店）

3／22　第4回「大相続時代　残すための町家相続学―対策と有効活用、使える遺言と使えない遺言―」　村尾法生氏（税理士、NPO法人京都資産相続相談センター）、高山修二氏（司法書士、NPO法人京都資産相続相談センター）

《セミナー参加者の集い》

＜第１、２期（第１、２回）＞

7／22　第1回「私の町家との付き合い方」

10／28　第2回「町家とのより良いつきあいの「きっかけ」」　小針剛氏（町家倶楽部ネットワーク事務局長）、ANEWAL Galleryの皆さん

＜第３期（第１、２回）＞

1／27　第1回「みなさんの町家との付き合い方を持ち寄りましょう」

3／16　第2回「町家との新しい付き合いのはじまり－貸し借り、直すこと、暮らすこと－」　小針　剛氏（町家倶楽部ネットワーク事務局長）

※各回コーディネーター：朝倉真一氏（まちひろば計画工房）

■まちづくり専門家セミナー

まちづくり専門家セミナーは、10周年記念事業の一環として、京都のまちづくりとセンターの支援の振り返りをテーマとした講演座談会を行うとともに、若手の専門家を中心にした研究会を開催し、まちづくりに関する様々なテーマに対して意見交換や他都市の専門家との交流も行いました。

センター歴代次長がまちづくりの歩みについて語る座談会や、センターの理事評議員が京都の景観まちづくりの今後について展望する公開座談会では、様々な課題が出される一方で、センターの財産として、これまで関係を持ってきた人と人のつながりの重要性が再確認されました。

研究会では、「地域運営」、「マンションの地域共生」、「コモンズ」などをテーマにしながら、まちづくりに関する意見交換を行いました。また神戸まちづくりワークショップ研究会の皆さんとの交流ワークショップを行い、「ワールドカフェ」というワークショップの新しい手法を学びました。

地域共生の住まいづくり

路地の共有から生み出されるおつきあい
―彩工房の「彩の街」の住まいづくり―

私たちが安心や安全を保ちながら暮らしていくには、何かがあったときにすぐに駆けつけられることができる近隣どうしのおつきあいが重要になってきます。そのようなおつきあいを生み出すきっかけとして、住まいの建て方も大切ではないでしょうか。地域の住民どうしのつながりを生み出す住まいづくりの取組として、株式会社DAC（本社宇治市）住宅事業部の彩工房が手がける「彩の街」を紹介します。

宇治市の住宅地に「彩の街」という10戸余りの戸建からなる一区画があります。これは彩工房が取り組む街並みづくりプロジェクトです。「彩の街」では近隣どうしがお互いの気配を感じられる工夫がされています。

京都では、現在でも昔ながらの路地を見かけることができます。路地では、住民どうしがお互いの気配を感じながら暮らしています。しかし、現在では、プライバシーや気密性を重視する傾向からか、近隣に対して閉じている住宅形態が増えてきたと言われています。

「彩の街」では、家々の境界に塀を設けるのではなく共有する路地として敷地の有効活用をしています。家の玄関は路地に面して配置される一方で、互いの玄関を直接対面させないといった工夫がされています。これにより、プライバシーにも配慮しながらも、近隣の気配を感じることを可能にしています。

同様に、道路面には、プライバシーを守るために目隠しとして木製の柵を設けていますが、柵の隙間越しに道行く人の気配も感じられるように配慮されています。

このように、共に暮らしていることを意識できる「彩の街」の住まいづくりは、地域のつながりを生み出す工夫と言えるのではないでしょうか。

この取組に関して、株式会社DAC代表取締役の森本均さんにお話をお伺いしました。

これまで、一般的に開発というと、坪単価の安さを追及し、法律で認められる精一杯のものが建てられるものが多く、それでは、居住者にとって必ずしも価値のある住まいや街にはならないとの思いがあったそうです。例えば、「彩の街」では、住戸配置での路地や目隠しの工夫以外にも、家の内部では、家族の気配を感じられるようにと、二階への動線を玄関からリビング・ダイニングを経るようにするなどの工夫も加えられています。

また、住宅の供給側は、一戸の住宅だけではなく、複数住戸による街並みを作ることができます。住まいの状況で、子供の成育や家族や近隣とのつながりが大きく変わる可能性もあるため、今後は居住者の生活環境や暮らし方に配慮し、人や街がどう育っていくかを考えた住まいづくりが求められるのではないかとおっしゃいます。

現在、「彩の街」の入居者には子育て層の方が多く見られます。区画内の道路や前面の駐車スペースなどでは、子どもたちの遊び場になる半公共的な空間づくりがされています。現在、開発中の10戸も加わり、これから子育てを通したおつきあいの中で、地域の防犯や防災の助け合いが生まれるなど、「彩の街」が10年後、30年後と、どんな街やコミュニティへとなっていくのかが楽しみにされています。

センターでは、地域とのつながりを生み出すきっかけとなる住まいづくりの取組事例をこれからも紹介していきます。

みなさんの地域でのまちづくりの参考になればと期待しています。

地域の企業と中学校の連携

市立伏見中学校は、生徒が「なりたい自分」を見つけるために、地域の企業と連携して、職業について考え、実際に体験するキャリア教育を行っています。山形校長が赴任された6年前、生徒が勉強する目標を失っていると感じ、「勉強はなりたい自分に近づくための手段。そのことを意識づけるには、どんな職業があるか教えることが大切」と考えておられました。それと同時期に、伏見の中小企業家からなる地域活性化同好会「バイタル伏見」(※)から、「地域に食と住を構え仕事をしている中小企業は地域が大切な基盤であり、総合学習が始まることを機に学校に関わり、地域の将来を担っていく子どもに、私たちの思いを伝えていきたい」と伏見中学校へ働きかけがありました。そして、双方の思いがタイミングよく重なり、キャリア教育が始まりました。バイタル伏見では、企業に生徒が取材して新聞にまとめる「豆記者体験」に3年関わり72社～60社の取材先を紹介し、企業の経営者が講師となって授業を行う「社会人講師講座」に10社～15社を紹介して運営協力しており、これらの取組は6年間にわたり継続されています。

1月24日には、社会人講師講座が行われました。「京の食文化」を担当された料亭清和荘の竹中代表取締役は、「子どもは素直だから、大人が歩み寄れば心を開きます。今回で3回目の講師ですが、地域の大人が地域の子どもを育てていくことが大切であるという考えに共感して参加しています」とおっしゃっていました。他の講師の方からも、「いつも店に通ってくれている生徒の将来に役に立てられてうれしい」との声も聞かれました。この講座は、生徒にとっては、地域で働く方から直接話を聞く貴重な機会であり、企業にとっては、生徒に仕事への思いを伝える中で、事業の意味を問い直す場となっています。

キャリア教育を通じて生徒の意識も変わり、進学率も上り、就職先も多様化しました。また、学校周辺の美化や緑化を通じて、地域との交流も深めていきました。「学校の活動を地域に知ってもらい、地域と連携して、さらにいろんなことをやっていきたい。地域との交流を活発にすれば、生徒も学校も伏見ももっとよくなる」と山形校長はおっしゃいます。

地域の企業との連携によって進む学校づくり。これは、まちづくりにも通じると思います。あなたの地域で課題となっていることが、企業の得意技を活用することで解消するかもしれません。企業も地域づくりにおいて重要な役割を担っていると改めて感じました。

※「バイタル伏見」：京都中小企業家同友会の伏見支部が母体の地域活性化同好会。ニュースレター24号P9参照。

平成19年度賛助会員　敬称略（五十音順）

H20年2月末現在

[個人]

秋山　正俊
朝倉　真一
芦田　英機
荒金　博美
石川　貴洋
石崎　了
石田　達
石原　一彦
石本　智子
石本　幸良
石森　雅裕
板倉　治男
糸井　恒夫
稲石　勝之
犬伏　真
今冨　僚二
上仮屋　尚
上原　任
上原　智子
江草　哲史
江籠　義貞
江田　頼宣
大島　仁
大関　法子
岡崎　篤行
岡野　哲也
岡本　晋
岡本　秀巳
岡山　尚義
奥　美里
奥山　脩二
押谷　昌成
影近　晴治
笠岡　英次
桂　豊
亀井　孝郎
川口　東嶺
上林　研二
上林　隆
岸田里佳子
北川　洋一
北村　信幸
木村　忠紀
木村　裕
桐澤　孝男
金辻　俊一
齊藤　修一
酒井　英一
坂根　朋子
坂根　正樹
坂本　登
坂本　正寿
相良　昌世
佐竹　和男
佐藤　七重
佐藤　洋
佐藤　友一
里見　晋
柴崎　孝之
島﨑　耕一
清水　博之
白須　正
城本　邦彦
新喜　富雄
杉浦　伸一
寿崎かすみ
鈴木　知史
園　孝裕
醍醐　孝典
高川　祐子
髙木　勝英
髙木　伸人
髙橋　修
髙谷　基彦
瀧本　章
武居　桂
多田　吉宏
田中　照人
田中　行夫
田辺　眞人
多児　貞子
谷口　一朗
谷口　進
寺田　恵子
寺田　敏紀
寺本　健三
十時惟友季
戸所　泰子
冨江　保
内藤　郁子
中井　徹
長井　典子
中川　慶子
中沢　洋雄
中島　吾郎
中島　弘益
中島　康雄
中谷　弘
中司さゆり
中村　忠夫
中村　豊
中山　雅永
西居　智司
西澤　亨
西嶋　淳
西島　篤行
西嶋　直和
西田　祐司
西村　健
西村　孝平
野村　正樹
橋本　典子
馬場　美彦
早崎　真魚
林　建志
林　裕之
林　道弘
平竹　洋子
吹上　裕久
福島　貞道
福島　信夫
福島　正俊
藤井　茂
藤本　春治
舩橋　律夫
古川　幸隆
平家　直美
星川　茂一
星野　民嗣
細川　義明
堀井　久司
本田　徹
正木　敦士
松田　彰
松村　光洋
松本　正
丸本　英俊
宮本日佐美
村田　清
矢田部　衛
山口　耕平
山崎　一樹
山本　一博
山本　一宏
山本　一馬
山本　耕治
山本　茂
善積　秀次
淀野　実
若松　貴也
脇山　芳和
和久山亮太
鷲頭　雅浩

その他7名の皆様

[団体]

NPO法人京滋マンション管理対策協議会
NPO法人マンションセンター京都
大阪ガス株式会社近畿圏部
オムロン株式会社
株式会社ジェイアール西日本伊勢丹
株式会社ゼロ・コーポレーション
株式会社フラットエージェンシー
株式会社都ハウジング
京セラ株式会社
京都駅ビル開発会社
京都府不動産コンサルティング協会
佐川急便株式会社
社団法人京都府建築設計事務所協会
渡文株式会社

私と京都

美しく移ろう京都の景観

武庫川女子大学教授
大谷　孝彦

私は兵庫県の西宮市で生まれ育ち、本格的に京都に身を寄せたのは昭和37年、大学の建築学科に入学してからです。それまでにも京都を訪れたことはありましたが、長い時間電車に乗って、という感じであまり近いところではありませんでした。初めて大学を訪れた日は赤レンガの二階建て校舎に雪が積もり、とても静かな雰囲気で、これからは京都で過ごせるということが大変うれしい思いでした。周囲にはすぐき菜などの畑がある下賀茂に下宿し、雪の日は雪道に新しい足跡を残しながら、また季節の折々には新緑や花紅葉のにおいを嗅ぎ分けながら、そこいらの寺や神社を訪れたものでした。町中には木造の建物が格子や黒い瓦屋根を連ねており、学生が下宿するのもほとんどがこのような民家の、簡単な襖で仕切られた六畳間でした。今にして思えば当時の京都にはまだ川端康成の小説「古都」のようなイメージがありました。

その後数えてみれば46年が経過し、京都の町も随分変わりました。赤レンガの校舎は鉄筋コンクリートの背高いビルとなり、雪が積もることもほとんどなくなりました。町中の風景も黒い屋根を連ねていた町家の多くがビルや駐車場になったりして、趣のあった町並みがガタガタになってしまいました。都市や社会は移り変わるものであり、千年の都も例外ではありません。京都は古きものを大切にしながらも常に新しいものを追い求めて成熟してきたといわれます。そしてそこには「美しく移ろう」心があったと思います。しかし今は美しいものが随分なくなってしまいました。勿論、ただ古いことが良いというわけではありませんが、そこらで目にする町の景色や人の様子には「古都」というイメージは失せてしまったようにも思われます。しかし、祇園祭を初めとする様々な年中行事や京料理のほっこりとした味わい、心ある町家住まい手のくらし振りの中には繊細で凛としたもの、なにか奥深いものを感じることがあります。これはやはり歴史の深みがなせるところでしょうか。

これからの京都はこのような歴史の深みを現代的に磨き上げて、再び美しく移ろうことができるのでしょうか。今から15年ほど前に京町家を再生保存する市民活動に参加し現在にまで続いています。戦災を免れたお陰で幸いにも多く残されている歴史的資産としての京町家です。それは木の柱梁や土壁による落ち着いた建物であり、美しさをさりげなく大切にするくらしの心が住み着いています。これからもそのような町家の再生による新しい京都らしさを目指した景観整備やまちづくりの手伝いを続けたいと思っています。新しい景観政策には大いに期待をしています。

センター解説アワー

京町家まちづくりファンド支援自動販売機の設置について

～販売価格の一部を京町家まちづくりファンドへ寄付する仕組を構築！～

第１号機設置の序幕セレモニー

京町家まちづくりファンド支援自動販売機は、より多くの方々に、京町家まちづくりファンドについて知っていただき、商品購入を通じて参加していただくシステムとして、清涼飲料水メーカーと共同で取り組んでいるものです。自動販売機の売上金から、一定の割合の金額（売上金額の概ね２～６％）が京町家まちづくりファンドに自動的に寄付されます。ご自身の管理敷地内に自動販売機の設置を考えておられる方、また、既に設置しておられる方は、ぜひ京町家まちづくりファンド支援自動販売機の導入をご検討ください。

お問合せは、京都市景観・まちづくりセンター管理課まで。

京町家まちづくりファンド支援自動販売機設置の状況（平成20年３月１日現在）

○京都市右京区嵯峨天龍寺造路町33　レストラン嵐山
　メーカー：近畿コカ・コーラボトリング株式会社
　設置協力：株式会社渡月橋

○京都市北区小山北上総町15番地（北大路通烏丸北東角）
　メーカー：株式会社伊藤園
　設置協力：株式会社相原

センター語録

昨年の１０月に京都市景観・まちづくりセンターに来てから、４ヶ月が経ちました。主に京町家の保全・再生に関わる業務を担当させていただいています。センターに来る以前の職場では建築に関する仕事をしていたのですが、鉄筋コンクリート造や鉄骨造ばかりで、京町家のような伝統的軸組木造について深く考えることもありませんでした。（京都で働いているのにお恥ずかしいことですが・・・）

この４ヶ月間を通じて、京町家は単に歴史的価値があるというだけではなく、その造り方からは、懐かしさというよりも、これからの京都を考える上でのヒントがたくさん詰まっているような新しさを感じています。しかし、居住者や所有者の方々は、本当に様々な悩みを持っておられることも分かってきました。京町家の保全・再生を進めるためには、そんな「人」を応援しないといけないのだと思います。

話はまったく変わるのですが、私は学生時代に県立のキャンプ場で補助員のアルバイトをしていました。子ども会や林間学校で施設を訪れる子どもたちに「良い思い出を持って帰ってもらうために！」という気持ちで仲間とともに一生懸命でした。報酬は交通費程度しかもらえなかったのですが、４年間も続けられたのは、一緒に頑張れる仲間がいたことと、そして何よりも「お兄ちゃん（当時は若かったので）ありがとう！」と言って、笑顔で手を振って帰っていく子どもらがいてくれたおかげだと思います。

もうお兄ちゃんではなくおっちゃんですが、その時と同じような気持ちで、少しでも皆さんに喜んでいただけるような仕事ができるように頑張りたいと思います。

（景観・まちづくりセンター事務局　I・S）

センターからのお知らせ

京都市景観・まちづくりセンターホームページ

http://machi.hitomachi-kyoto.jp

センターの取組内容をはじめ、まちづくりに関する様々な情報を発信するホームページ。

皆さんの地域のイベント情報、まちづくり情報も掲載します。メールマガジンの登録も受付中です。

センター活動拠点のご案内

京都市景観・まちづくりセンター

〒600-8127 京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83番地の１（河原町五条下る東側）
「ひと・まち交流館　京都」地下１階
TEL 075-354-8701
FAX 075-354-8704
e-mail : machi.info@hitomachi-kyoto.jp

●開館日（相談の受付等）
9:00～21:30（月曜日～土曜日）
9:00～17:00（日曜日・祝日）

●休館日
毎月第３火曜日（国民の祝日に当たるときは翌日）
年末年始（12月29日～1月4日）

なお、センターへのお越しの際は公共交通機関をご利用ください。

平成20年度の賛助会員を募集しています。

京都のまちづくりに貢献したい！センターの活動を応援したい！そんなあなたの熱意をお待ちしています。

[特典]
- ニュースレター（年4回・季刊）の送付
- 冊子等センター発行物の割引
- ニュースレターでの活動紹介
- シンポジウム、セミナー等への優待
  賛助会員の方は、景観・まちづくり大学のすべてのセミナーを無料で受講できます。（賛助団体の方はひとつのセミナーで3人まで受講可）

[年度会費]
個人1口：5千円　団体1口：5万円

まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。

ニュースレター　京まち工房　第42号　2008年3月　編集・発行　（財）京都市景観・まちづくりセンター　印刷　日本写真印刷株式会社